

好き好き京ちゃんマジ
あいしてる

山莊

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

咲 「嫁さんです」

照 「嫁さんです」

姉妹喧嘩勃発

眠気にかまけた作品。みじかいよ！

目

次

妹の方

董

v

s

照

血斗編

9 1

妹の方

「おつ、また夫婦揃って飯食つてる」

清澄高校の食堂にて、同じテーブルで向かい合つて昼食を取つていた須賀京太郎と宮永咲は何時もの如くそう揶揄された。

「嫁さんですけど!?」

「違いますけど」

咲は即答した。

京太郎も即応した。

咲はぐぬぬと顔を歪めた。

世はなべて事もなかつた。

宮永咲は須賀京太郎に恋をしている。それはもう熱烈に。

出会いは中学一年の頃、小学校から進学して、人間関係も全てと言わないが一部りセツト。それと同時に思春期特有の気恥ずかしさに、咲生来の人見知りも加わつて、クラスメートにろくたら話掛けなかつた。

向こうから話掛けられてもどう対処したらいいのか分からず、素つもない対応。こうしている内にクラス内のグループ、そのおおよその枠組みも決まつてしまつて。中途から入るには難しくなつてしまつた。

そうなると咲のようなコミュニケーション能力が不全がちな人間からするともうお手上げである。元来人見知りなのだから小学校時代から友人は少なく、持ち上がりで同じ中学に入つた友は雀の涙。その証拠にクラスに小学校からの友達は一人も存在しなかつた。

こうなつてしまつては最早咲が取る手段は一つしかない。休み時間の度に自前の小說を広げて、外界を遮断するポーズを取る。あくまでポーズである。こうすることによつて「私は静寂を愛する文学少女なんですけど?」この孤独は自ら欲したものなんですが?」という無言のアピールを示すことが出来た。誰がその発信を受け取つているのか分からぬが。

だが、そんな文学少女(笑)咲ちゃんに話掛けてくる奇特な人間がいた。言わずもがな、京太郎であつた。

須賀京太郎。髪は金髪高身長、顔は男らしさの中にどことなくあどけなさが残る二枚目で、そのくせ中身は二枚目半というよくよく考えたら凄まじいスペックの持ち主であつた。

珍稀な髪色が人権を得まくり跳梁跋扈するこの世界において金髪は置いておこう。しかしそれを差し置いても咲からすれば残りの要素だけで天敵に近しい。後日分かうことだが上記のステータスに更に「スポーツマン」が付随する。どう考えてもクラスの中心人物キャラだつた。今風に言うと陽キャである。陰に潜む咲とは相容れぬ存在のはずであつた。

が。

グループ作りに乗り遅れた立場からすれば、そういうったクラスカースト上位の人間に引き上げて貰わねば追いか付くことが出来ないのもまた事実で。

しかもこの須賀京太郎という男、上位者から下位に向けての「弄り」という角度からの接触ではなく、同じ目線に立つた、ものすごい優しい話の仕方で。

イケメンで、スポーツマンで、優しくて、親身。

咲は思つた。

惚れてまうやろ。

と。

といふか惚れた。

そして今に至る。

想いは中学から高校になつても変わらない。寧ろ積み重ねた分だけ強くなつてい
る。既に咲はこと京太郎に関してのみ引っ込み思案であることを止めた。それすなわ
ち、自称嫁である。私は京ちゃんの嫁であると公言して憚らぬようになつた。アグレッ
シブ咲さん誕生である。

「そういえば京ちゃんはもう部活つて決めたの？」

日課である公然での嫁宣言を果たした昼食を終え、咲と京太郎は教室に戻り残りの昼
休みを駄弁つて消化していた。

「ああ、もう入った」

「ふうん、ハンドは清澄にはなかつたよね。今度はハンドとはまた違うスポーツ?」

素知らぬ顔を装つてはいるが内心では興味津々である。というか、内心を津々が突き
抜けて外面にまで貫通している。

「いや、 麻雀部」

「へえー そうなんだじゃあ私も入るね」

即答であつた。

今回ばかりは京太郎も断る理由がなかつた。

放課後、 麻雀部部室にて。

「……あー。鴨？……いや……新入部員連れてきたぞー」

京太郎はその連れを何と表現するべきか頭を捻らせた結果、なんとも穏当な着地を済ませて部室に入った。傍らには咲もいた。違う世界線では後から促されて入つて来たというのに、しかしこの世界ではアグレッシブ咲さんだったから。

新入部員、それも大会に参加するために出来れば女子、それが喉から手が出るほど欲しかった麻雀部部長、竹井久は「でかした！」と言おうとして言葉に詰まつた。

黙一等であるはずの男子部員の腕に、可愛らしい少女がくるりと巻き付いていたからだつた。

「ええと、彼女さん？」

「違い」「そうです！」

否定の言葉は食いぎみの肯定に取つて食われた。

「新入部員の須賀咲です。よろしくお願ひします」

「……妹さん？」

「違います嫁です」

「嫁さん違います妹違いますこちら宮永さん家の咲さんです」

「……ええと」

頭の回転が中々に素早い久でも、流れるような展開に思考が縛れる。

「……とりあえずよろしくね？」

ひとまず全部うつちやつて、悪待ちの彼女は二人を部室内に招き入れた。

女子女子女子、女子である。麻雀部内の女子比率は極めて高い。咲はぎりいと歯を鳴らした。実際は鳴っていない。そうした、という咲自身による脳内イメージだ。代わりに絡めた腕をより一層強く胸元にかき抱く。「当たつてるんですけど?」と言われれば「当ててんのよ」と返せる程度の密着度だった。悲しいかな膨らみはささやかに過ぎて、京太郎からしても「なんかやわっこいなあ」程度の感想しか持てない平原が咲の胸部にはあつた。

同時に、ここ数年で磨き抜かれた咲の「京ちゃんスカウター」を発動させる。これは京太郎に関するありとあらゆることを数値化することが出来る咲の特殊能力であつた。本家のスカウターと同じくらい頻繁に壊れるのが珠に瑕。

「お、おー。咲ちゃんかー。わたしは片岡優希、よろしくなー」

少しばかり引きながらも挨拶をしてくるちんまい少女を咲は見る。

——元気っ子タイプかな。異性との交遊関係を簡単に作れそう。でもその分友人関係から進展する可能性は低そう。それに胸も……。うん、驚異度20くらいかな?

一部分ブーメランがぶつ刺さるような感想を浮かべつつ、咲のスカウターは女子一人

一人を恋敵となりうるか測定する。

「うん、よろしくね。片岡さん」

「ゆ一きでいいじよ。わたしも咲ちゃんて呼ぶから」

「分かつた、優希ちゃん」

「そんでこつちが……」

「……原村和です」

優希から促された驚異の胸団をおもちの少女が浅く頭を下げる。向けられる視線は冷ややかだ。

——潔癖なのかな。男性ギライもちよつと入つてるかも。……でも全てを補つて余りあるあのおもち、おもち！……胸団度、じやなくて脅威度は85かな。

「よろしくね」

脅威度に比例して非礼も増す。シャー、と耳と尾っぽを立てて威嚇する猫のようだ。「で、わしが染谷まこ。二年の副部長じや。実家は雀荘をやつとるから、暇があつたらよろしくの」

——眼鏡だ……。京ちゃんは眼鏡萌えだつたつけ？ その線はまだ確かめてなかつたなあ。今度伊達眼鏡掛けてみようかな。……うーん、この人は何処と無く京ちゃんと似た雰囲気がありそうな。要らない苦労を背負つちゃうような。……脅威度は、45く

らい？

「よろしくお願ひします。染谷先輩」

「まこで構わんよ。と言つても先輩をいきなり下で呼べっていうのはちよいときついかの」

はは、と笑うまこに対して咲もまた笑みを返す。

「私が部長の竹井久、三年よ。あらためてよろしくね、須賀咲さん」

——うん、この人はいい人だ。脅威度はもう0でいいんじゃないかな……！

早速スカウターが壊れた。そういえばこの人学生議会長だな、とか、黒ストッキングのエロティシズムは脅威だ、とか一切合財放り投げて、味方だよね、うん、味方。と決め打ちしている。

須賀じゃないつす。冗談よ。という京太郎と久の会話も右から左に抜けていって。

まずは試しに一局打ちましようか。上の空ながらもどうにかその言葉だけは拾えた咲は、夢遊病患者のように、あるいは誘蛾灯に誘われるかのように、雀卓に着いたのだつた。

董 V S 照 血斗編

月刊麻雀アイ五月号。特集「歴代最強、白糸台『虎姫』三連覇に迫る」内、宮永照イ
ンタビューより抜粋。

——宮永選手も今年のインターハイが高校最後。三連覇が賭かつた大会になります。
プレッシャーというものは感じていますか？

宮永照 「プレッシャーは毎回感じています。確かに今まで優勝という最良の結果を
残すことが出来た。ですが、それは決して磐石のものではなくて、一つ間違えれば私
達が敗北した試合がいくつもあつたと思います。お互いに、必死、真剣。その中の鎧
を削っています。平常心で、とは意識していますが、一戦一戦がそういう状況ですから」
——なるほど。確かに各高校がインターハイという一年間の総決算に賭ける想いと
いうのは凄まじいものがあるのかもしれませんね。

宮永照 「そうですね。私達が強い、と驕ることはありません。強さというものは自身
の口から語るものではなく、周囲が認めるものだと思っていますから。ですから当然、
プレッシャーもある。……王者、と呼ばれることがあります、私はいつも『自分は挑
戦者だ』と考えて牌を握っています」

——そのチャレンジャーとして立ち向かう精神が結果に結びついているのかかもしれません。特に宮永選手は試合中ポーカフェイスを崩さずにいます。これもまた強靭なメンタルによるものでしようか。

宮永照「ポーカーフェイス、というのも一つの技術だと思います。精神的な要素もありますが、訓練次第で獲得できます」

——では、宮永選手も最初はそういった技術を持つていなかつたと。

宮永照「そうですね。よく意外に思われるんですが、これでも親しい人間からはコロコロと表情が変わると言われているんですよ」

——そうなんですか？　いや、想像できませんね。そのような宮永選手は。やはり、友人や肉親の前ですと、言い方は悪いかもしませんが、年相応の表情を見せると。

宮永照「ええと、一番素を見せるのは……そうですね、友達や両親よりも……」

——よりも？

宮永照「彼氏、の前ですね」

——はい？　彼氏？　いえ、宮永選手、それは公にしていいものなんですか？

宮永照「はい、不純なお付き合いをしているというわけではありませんし、私自身プロ志望ではありますが、『アイドル雀士』としてデビューしようとも思っていませんから。私だって年頃の女子高生、そういう人がいてもおかしくはないと思います」

——ああと、その。……では、宮永選手の強さの秘訣として、その、彼氏の手厚いサポートもあつてのことということです。

宮永照 「京ちゃん……その、彼のことをそう呼んでいるんですけど。彼とは東京と長野の遠距離恋愛で、あまり頻繁に会えないのですが、それでもテレビやこういった取材を通じて彼が私のことを見てくれているのかなって思うと、心の中に勇気が湧いてくるんです」

——あー、それは、とてもお熱い仲なんですね。

宮永照 「はい。愛していますから」

突然の爆弾発言も飛び出した宮永照選手のインタビュー。彼女の強さの秘訣は支えてくれる恋人の存在もあつた？ 精神論について語つてもらつた前半。続いては宮永照選手の技術論に迫る。後半は五十ページ後。

投擲。

それは人類が生み出した発明の一つ。人は火と投擲を生み出したことにより進化と発展を遂げ、やがて靈長の王に至つた。

投げる、放つ、打ち出す。大地を踏みしめる足から爪先へエネルギーは始まり、下腿

三頭筋へ伝わり、大腿二頭筋、大臀筋を通過し背筋へ。広背筋、僧帽筋を流れ、腕へ向かう。上腕三頭筋へ繋がり、総指伸筋を突き抜け、伸筋支帯へ辿りつき、やがてその結集が手のひら、指尖へ至り、放たれる。

人は、それによつて獣を狩つた。四足を捨て二足へ至り、純粹な肉食獣が持つ爪牙の変わりに得たのが、「投げる」という動作だつた。人間の成りは、それに特化している。

つまり、何が言いたいのか。

つまるところ、彼女を指してこう言いたい。

確かにそれは誹られる行為だつた。

確かにそれは投げてはいけないものだつた。

しかし、それでもやはり。

彼女のその投擲はその瞬間地球上に至る全ての人類の中で最も美しいフォームで、最も勇ましい勢いをもつて、全ての憤怒を叩きつけるようにして解き放たれたものであつて、最早そうするしかない、という遺る瀬無さがもたらしたものであるということを鑑みれば、十二分な情状酌量の余地があるのでなかろうか。

例え彼女が白糸台麻雀部部室内床に叩きつけたそれが、出版社から送られてきた貴重な献本であつても、その書かれている中身に目を通せば、彼女自身の立場も相俟つて「かくあれかし」と頷くべきものであると理解できるはずだ。

ずぱあん！

月刊麻雀アイ五月号が部室の床とキスをして奏でた音は到底甘酸っぱいものではなく、炸裂音に似た音だった。

そしてそれは事実、闘争の始まりを予感させる音。

彼女、弘世董が宮永照に向けて戦争の始まりを告げるゴング……！
「みい～やあ～なあ～があ～……」

地の底から這うような声が部室内に響く。声の主は、誰が発したかについて触れるのは野暮か、あるいは彼女の尊厳に障るか。

とりあえず、釣り少女は「やつべえ」と小さく呟いたあと目を伏せて、おもち眼鏡少女は触らぬ神に祟りなしと言わんばかりにお茶を啜りながら中空を見つめて。

だがアワレ、唯一一人、チーム虎姫において最も彼女との付き合いが短い次期エースがまさに「虎」と化した彼女に触れようとしてしまった。

「あ、あの～スマレ？　どうしたのかな～なんて……ひいつ！」

ぎよるん、と、「虎」の首が少女へ向けられた。暴走した汎用人型決戦兵器めいた動きで射竦められた少女は思わず悲鳴を上げる。

あつ、これヤバイ奴だ。授業でやつた奴だ。たしか、三月記？

日頃先輩にわりかし舐め腐つた態度を取つてゐる彼女も一度で理解出来る「淒み」が

そこにはあつた。コワイ！ そして人が虎になる文学作品と将棋マンガが少女の中でナチュラルに大分混じっていた。アイエエ！

「淡い……。宮永照を見ていいのかあ……」

やつべえ。

淡と呼ばれた少女はそう思つた。語彙も何も無かつた。ただただやつべえと思つた。そりや誠子もそう呟くわ、と思つた。

「て、テルー……？ きよ、今日はまだ見てないかなーって」

「……ハアー。……そうか。まだ見ていないか……」

深々と息を吐いて、彼女はようやく怒りを吐き出した、かのよう表面には見える。流石に関係のない第三者に当たるほど理性を失つていなかつたらしい。だがそれでも淡は理解している。悪戯に突けば破裂するそれだと。吐き出した呼気には死の薰りが燻つていると。不発弾。ただし衝撃を与えた九割九分九厘炸裂すると。

来て！ メイン^テルー！

そう願うのは生贊を所望するような酷薄さだろうか。否、否だろう。どうせテルーが何かやらかしたに決まつてゐる。だからさつさと部室に来てスミレの怒りを一心に受けれるがよい、テルー！

淡はそう願つた。

そしてその願いはすぐに叶う。それもそうだ。今は放課後、これから部活。強豪白糸台において平日休みは存在しない！ならばテルーはやがて来る！

こつり、こつり、と、廊下を誰かが歩く音が聞こえる。

ぶわり、と、弘世董の艶のある黒髪が重力に逆らい始める。さながらジブリアニメめいたその威風。「それあたしのやつ！」と突つ込む一年生は此処にはいない。既に心が挫けているから。

がちやり。何者かが部室の扉に触れた。扉の窓からシルエットが見える。具体的に言うと、^{ホーン}角。

嗚呼、来た。来てしまつた。それが一体廊下の影と部室内の虎、どちらに向けるのが正しいのかは分からぬが、ともあれ、来て、しまつた、

董の瞳が鋭く搾られる。狩人の目つきだ。シャープシユーターの視線だ。彼女の背後に薄つすらと見える鬼の姿は鎮西八郎かはたまた那須与一か。

扉が、開く、音が響く。

ぎぎぎい、と音を立てている。

淡はあんなに軋んだ音を立てたつけ、と遠くに思考を解放していた。やがて、思つていた通りの少女が、思つていた通りもつしやもつしやとクツキーを貪りながら、部室に顔を見せた。

刹那。

弘世董の五指が。

宮永照の顔面に。

食い込んだ。

「宮永照う……。お前は 一体何をカミングアウトしているんだ……？」

至極真つ当な怒りが、女子高校雀チャーンプを襲う！